

文学大会「詩」 小中学生の部

(優秀) 小学生の部

トマチちゃん

水戸市立常磐小学校 二年 蛭田 遥香

トマチちゃんは、
すっぱいトマトになるのかな。
あまいトマトになるのかな。
いもうと、
おとうさん、
おかあさん、
わたしで
おいしくたべるからね。
まい日
お水をあげるから、
おいしくそだってね。

【講評】

すっぱいトマトになっても、あまいトマトになっても、
家族みんなに食べてもらうため、大事に育てていこうと
いう思いが感じられます。育てているトマトへの愛情が
よく伝わる、かわいらしい詩です。

ほうせき色

水戸市立千波小学校 二年 椎名 美詞

ほうせきたちが 話しているよ
なんだかたのしそう
あたしはこんな色にひかるのよ
きらきらだね
ぼくはこんなつるつるだよ
わあ、かがみみたいだね
わたしは、たくさんの色がかさなっているわよ
にじみたいね
うふふ
あはは
みんなきれい
みんなすてきだね
みんなちがう色なのに
みんなほうせき

【講評】

たくさんの宝石を集めて、じつと見つめている――
おそらくこの時間が至福の時なのでしょう。宝石たちを
いろいろな角度からよく観察して、感じられたことを素
直に表現しています。

子どもの日

水戸市立常磐小学校 四年 神原 壮太郎

こいのぼりがうかんでる
かぶとをかぶった男の子
かしわもちをもぐもぐもぐ
ちまきももぐもぐもぐ
しょうぶのおふろにはいってみると
長生きできるよ
楽しいことが
たくさんあるよ
子どもの日

お花見

水戸市立上中妻小学校 四年 飯田 文也

花がたくさん
きれいだな
フワフワ
モコモコ
さわりたい
花びら 風と遊んでる
ひらひら ひらひら
おいかけっこ
花びら 川で泳いでる
パシャパシャ パシャパシャ
きょう走するよ
花がたくさん
きれいだな
えがおもいっぱいさいてるよ

【講評】

「こいのぼり」「ちまき」「しょうぶ」などといった風習を、詩の中で楽しく紹介しています。待ちに待った子どもの日を、今年はどのように過ごすのだろう、と読者の想像がかきたてられます。

【講評】

風や川の中に落ちていく花びらをしっかりと観察して、豊かな感性で捉えています。「フワフワモコモコ」「ひらひら」「パシャパシャ」などのオノマトペが、楽しいリズムを生んでいます。

わたしとピアノ

水戸市立上中妻小学校 四年 内田 麻都

わたしはピアノが好き

ピアノを見ると

ひきたくなる

ポロン

ポロン

リズムに乗せて

軽やかに

ポロン

ポロン

わたしの気持ちも

軽くなる

えんぴつと消しゴム

水戸市立柳河小学校 六年 横山 大翔

えんぴつは、いつかなくなる。

えんぴつは、使うとなくなる。

なくなるのにうれしい。

がんばった気がする。

消しゴムも、いつかなくなる。

消しゴムも、使うとなくなる。

なくなるのにうれしい。

がんばった気がする。

【講評】

「ポロンポロン」の表現の繰り返しによって、軽やかなリズムが生まれています。ピアノの音に乗せながら、「わたしの気持ち」も音楽を気持ちよく奏でている様子が伝わります。

【講評】

二連構成、シンプルな文の繰り返しに、熟考を重ねたことが伝わります。「なくなる」ことの寂しさ。その後の「なくなるのに」という表現から、予期することと違ったことがあるのかな？と期待させる言葉の選び方が見事です。

しりとりできますか

水戸市立吉田小学校 六年 紺野 愛良

百獣のライオン
首が長いキリン
泳ぎが得意なペンギン
本場にいます？ドラゴン

そんなすごい生き物は
しりとりができないらしい

和食の代表ごはん
洋食の代表パン
映画のおともはポップコーン
みんなの人気者ラーメン

そんなおいしい食べ物は
しりとりができないらしい

【講評】

「ん」のつく誰もが知っている生き物や、食べ物たちは、しりとりができないらしいという、思わず同情してしまう愉快な詩ですね。韻を踏むことで音の調子が整い、軽快なリズムが生まれています。音読が楽しみになる詩です。

天気は感情を現している

水戸市立吉田小学校 六年 平澤 峻

天気は人に似ている
太陽は笑っている
くもりは困っているようだ
雨は泣いているようだ
かみなりはおこっているようだ
にじは泣いたあとに笑っているようだ

【講評】

日によって変化する天気を、日々人間が感じる感情と対応しているという平澤さんの発想が新鮮です。その日の天気が、私たちへのメッセージにも感じられます。これから見上げる空が楽しみになる、そんな詩ですね。

(優秀) 中学生の部

桜

水戸市立第二中学校 一年 徳永 夏峰

ランドセルを見つけたら
ゆっくりひらひら 舞い降ります
だれかがカメラをむけてきたら
おちずにじーっとまちます
最後の一枚が舞い散ったら
しずかに緑へころもがえします
花開く季節を走りきるまで
わたしは木から見ています
たくさんの笑顔が
満開になることを願って

【講評】

桜の花びらが人間達を優しく見守ってくれている温かい作品です。桜の花びらを擬人化することで、誰かの笑顔のためにたくさんの気遣いをしてくれる、とても優しい花びらを表現しています。

いつかは…

水戸市立第二中学校 一年 森永 菜央

ひかりのシャワーを
たっぷりうけて
すくすく すくすく
そだちます
いつかおひさまに
とどくかな
あなたにむけて
わたしはここだよ
まっつてね

【講評】

太陽の光を「ひかりのシャワー」に例えることで、そのシャワーを浴びることで「何か」が元気に育っていく情景がうかがえます。その「何か」が一体何なのか、読者が様々な想像を膨らませることができるとは素晴らしい作品です。

プレゼント

水戸市立石川中学校 一年 浅井 兼続

月火水木金

この苦しくも楽しい百二十時間を過ごした人にだけ

四十八時間のプレゼントがもらえる

そのプレゼントをもらうために

みんな今日をがんばってる

プレゼントの使い方を考えながら

忘れがさ

水戸市立石川中学校 一年 小林 結愛

しずくが静かにしたたる。

空にはにじいろの橋がかかっている。

電車の中、お店のかさたて

ずつとずつと、とどまっているかさがある。

どんな気もちだろうか。

(さびしいような、だれかに使ってもらいたいような。)

近くでたくさん入れ変わる。

目の前を人がとおる。

それでも待ち続けるんだ。

また、だれかの助けになるために。

また、自分に水がふりそそぐために。

今は、仕事の休み時間、

時の流れに身をまかせて、

次の雨の日まで待つんだ。

【講評】

題名の「プレゼント」ってなんだろうと、読者に想像をかきたてる作品になっています。土曜日、日曜日を「プレゼント」に例えるユニークな発想からは、作者の遊び心がみられ、多くの人に共感をもたらすのではないのでしょうか。

【講評】

忘れられた傘の気持ちを作者が上手に表現した作品です。使われたい、忘れられてしまっている傘が、いつまでも雨の日を待ち、いつか使われることを待ち望んでいる。そして、誰かの助けになりたい、そんな傘の想いを作者が代弁しています。

花よ、美しくあれ

水戸市立緑岡中学校 三年 工藤 さやか

人はみな、花をもっている。

赤ん坊のころはただの種だ。

だが、それは立派な花になる。

赤く、大きい勇敢な花。

青く、小さい花弁の聡明な花。

黄色く、根の太い強かな花。

同じ花は一つもなく、どの花もまぶしく輝いている。

劣る花は一つもなく、どの花も美しく咲いている。

時には、自分の花を枯らせてしまうこともあるだろう。

花が美しく見えなくなった時、

花を育てるのが億劫になった時、

他人の花の方が美しく見えてしまった時。

自分の花が枯れてしまった時、再び咲かせるのは難しいかもしれない。

でも、思い出してほしい。

その花は、何色だった？

花弁は何枚だった？

大きかった？それとも小さかった？

どのように輝いていた？

そうして気づくと、再び花は美しく咲いているだろう。

自分の花をよく見て、認める。

そうすることで、より花は輝きを増す。

世界を広く見渡すと、世界は美しい花々で満たされている。

その花々のどんなに美しいかを見てみよう。

この世界中がより輝くまで。

【講評】

人間を花に例え、誰一人同じ花はないんだと作者の力強いメッセージ性の高い作品となっています。誰しもが持っている悩みや劣等感を自分の花を思い出すことで、また輝かせることができる。そんなたくさんの花の情景も想像することができます。

落ち葉

茨城中学校 三年 加藤 桜浦

下校中

ふと木の根元を見てみると

前はあった落ち葉が少なくなっていた

もしかしたら、と私は思った

ダンゴムシが分解しているのかも

普段は気にもとめない小さな変化

きつと世の中には

見えないところで誰かが誰かの役に立っているのだろう

それに気づいて

「ありがとう」と、いえる人になりたい

【講評】

何気ない、小さな日常の出来事から作者の考えに大きな変容があったことが書かれた作品です。この世に存在するすべてのものに役割があり、そして、何気ない日常に感謝する作者の思いが伝わってきます。

文学大会「詩」一般の部

優秀（第一位）

つめたい骨

水戸葵陵高等学校 三年 王 欣暉

ほねを

ほねを埋めようと思う

平和のほねを

いま、人々は血を流し

尊厳は崩れ落ち

手に残ったものは 硬い金属の塊か

とおい未来の叫びを無視して

ちかい現在の囁きにうなづく

花は泣いた 土地がもう優しくなれないことを

人々は疎んだ 敵は殺すべきだと

空は嘆いた ほんとうの意味で蒼くなれないことを

人々は涙した 愛する人々が消えていくことを

鳥は悲しんだ もう住処が安全ではなくなったことを

人々は死んだ 自らの愚かさに耐えかねて

人間 同じ赤い血を流し

共に広い空のもとで 息をし 心臓を動かしている

なぜ 心を一つにできないのだろうか

平和のほねは重くて冷たい

埋めた土地から 一輪の花が咲いた

また ここからはじまるのだ

【講評】

〈ほねを埋めようと思う／平和のほねを〉というフレーズが心に突き刺さる。詩は、そのあと戦争で荒廃する世界の姿が描かれ、大地も、繋がりを失った人々も敵意に満ちている。未来を考えない今だけの悲惨な状況に〈平和のほねを〉埋めるといふ行為には、二つの意味が暗示される。ひとつは死んだ平和を埋葬するといふ意味。もうひとつは、埋葬したその骨から、新しい平和の花が再生するといふ希望。私たちは後者を心から祈りたい。

優秀（第二位）

水わらび

茨城県立水戸商業高等学校 三年 田村 寧々

その透明な肌に

その透き通るような笑顔にもう一度会いたい

僕の前から消えてしまいそうな君

夏の暑さに溶けてしまいそうな君に触れていたい

今ここに君はいないけれど

きつと繋がっている

どこか遠くで暮らしている君も

同じ地面の上で

いつかは同じく風に吹かれ

その風は僕の元へと届くのだろう

あの日一緒に食べた水わらびのような

この喉をすうっと通り抜ける感覚は

君と居る時の、時の流れに似ている

ひんやりと冷たい君の声は

煩わしい蝉の声を止める

僕は半透明になる

僕を涼しくする

黒蜜のかかる皿には

別れる日の君の背中が鮮明に浮かんでいる

胸が焼けるように痛むのに熱を持って冷めていく

この感覚を

心に穴が空くような感覚も

君の前では飲み込んでしまうのだろう

また君に会える事を願って

もう一つの水わらびをつまんだ

【講評】

〈水わらび〉とは、透き通って涼しげに揺れる夏の和菓子のこと。去った恋人への切ない想いが、〈水わらび〉の透明で冷たい触感、はかなげな質感と、具体的に、感覚的にひとつに溶け合って、見事な恋の詩になっている。

優秀（第三位）

時の移ろい

宮崎 博子

刻一刻と烈しくなる北西の風
唸るようなもがり笛に怪異が漂う
ひゆうる びゆうん びゆるるん
笛の鞭音 私哭声
不協和音が耳を刺す

〈貴方ノ命ヲ奪ツタ彼奴ガ憎イヨ〉
（怨みつらみは お前を惨めにするだけだ）

〈辛クテ悲シイ 独リジャ生キラレナイヨ〉
（涙洒れるまで泣け 孤独に耐えろ）

〈貴方ノ元へ連レテイッテヨ〉
（だめだ 甘えるな 生きるんだ）

鳴り止まない不協和音を掻き寄せ
凍土に埋めた

穏やかに時は流れて……「節分」
榊の枝陰 温んだ土の中から

「節分草」が顔を出す
早春のタイムリーカレンダー

一本の花茎に白い小花一輪
深裂の葉もつけて
コスチュームが揃う

フェアリーたちは
ステージの庭を忘れない
笑顔を振りまき
軽やかに踊る

「凧」から「節分」への移ろいを
届けてくれたのは
ありのままの自然界？
変容していく人の心？

これらの現象を感受できるのは
独りで生きる私

【講評】

冬の烈風に混じって聞こえる怪異な哭声は、自分の心の中から漏れ出る身近な人を奪った運命への怒り、悲しみ、怨嗟と葛藤の声だ。やがて節分が訪れ、春、花が咲く。人も自然の一部だとすれば、その心もありのままの自然の時の移ろいのままに変容していくのだろう。こうして独り無心に生きていくのも悪くはない。しみじみと感慨にふける詩。